

AJCC研究会報告

「ヴェネシヤン・ライカ」

会員番号0810

竹内 久彌

2018年3月10日

於 JCI16階会議室

ヴェネシヤン・ライカとは

「ヴェネシヤン・ライカ」、すなわち「ヴェニス
のライカ」と言ってもヴェニスのまちなかでライ
カが作られていたわけではない。第二次大
戦終了直後の一時期に、イタリアのヴェニス
を北に数十キロ離れた地方で、10機種以上
のライカコピー機が5年間あまりの間、製造さ
れたことがあり、この一群のカメラをイタリアで
は製造地にちなんで「ヴェネシヤン・ライカ」
(Venetian Leica)と呼んでいると言う。ヴェネ
シヤン・ライカは、当時、多くの国で数多く出
現したいわゆるライカコピー機のひとつと言っ
てよいカメラではあるが、優れたイタリアンデ
ザインの伝統を生かしながら、戦時中に軍需
工場として培われたであろう工作技術を駆使
して、その上にいささかの工夫を加えること
により単なるライカコピーとは一味違う中級以上
のカメラに仕上げられているところがなかなか
面白いのである。

ヴェネシヤン・ライカはそもそも生産された
台数が少ないため、中古カメラ市場で手に入
れ難いこともあって、これまで我が国ではほと
んど注目されて来ていなかったところだと思

われるが、たまたま筆者はその洒落たネーミ
ングに惹かれてしまい、実機のうちの相当数
を手に入れることができていたので、その全
体像を判明した限りではあるがここに紹介す
ることにした。

ヴェネシヤン・ライカは“ゾネ”から始まった

ヴェネシヤン・ライカはほぼ2カ所で製造さ
れたという。そのうちの1カ所はポルデノーネ
であり、そこではゾネと名付けられたカメラ
が1947年から作られた。もう1カ所はベッルー
ノであり、そこではクリスタルおよびヴェガと名
付けられたカメラがCD(キナーリア・ドメニ
コ)、GNM(グイド・ノニーニ)またはAFIOM
(Apparecchi Fotografici Italiani Officine
Meccaniche)のマークを付けて製造された。

第二次大戦中にフィレンツェからヴェニス
の東北60kmのポルデノーネに疎開していた
光学機器メーカーのオフィチーネ・ガリレオ
社で設計技師として働いていたアントニオ・
ガット(Antonio Gatto)は戦後にポルデノーネ
工場の設備をそのまま残してもらうことに成功
し、そこで、友人であるカメラ卸売業者のジョ

ルジオ・モレッティ(Giorgio Moretti)の協力を
得て“Gatto Cav. Antonio”という名の会社を
新規に設立してカメラの製造を行うことにし
た。そして、そのカメラとしては1945年のベル
リン宣言によってドイツの特許が公開されて
自由にコピーが可能となったライカコピー機
を1947年にゾネ(Sonne)と名付けて市場に
出すことに成功した。ここにヴェネシヤン・ライ
カの第1号機が登場したことになる。

ゾネIV (Sonne IV) (写真1、2)

1947年に製造が開始されたゾネIVは一
見してバルナックライカのコピー機ではある
が、単純なコピーではなく以下に述べるよう
に幾つかの相違点が見られる。

相違点の第一はシャッター・リリースボタ
ンの位置を前方に移動させ、それをさらに円錐
形の設定リングの中心に置いたことである。第二は、ボディ裏蓋をヒンジで完全に横
に開ける方式をとったことである(写真2)。

また、機構的にも独自点が見られ、フィルム
装填は巻き上げ軸下方に設けられた小さい
爪状突起にフィルムの下側パーフォーレーシ
ョンを引掛けてフィルムを巻きつける方式を
採用している(写真2の拡大部)。この装填方式
は慣れないと行い難い欠点があるが、以後の
ゾネの最終型まで引き継がれた。



写真1 ゾネIV(タイプII)

外形上バルナックライカのコピーであることは
一目瞭然と言えよう。標準レンズのガリレオ製
Anastigmat T-ELIONAR5cm F3.5が付けられて
いる。



写真2 ゾネIVのボディ後蓋を開けたところ
左ヒンジで横に開けられることが分かる。

また、右側のフィルム巻き上げ軸の下方に下
側パーフォーレーションを引っかけるための爪
を見ることができる(右拡大写真参照)。

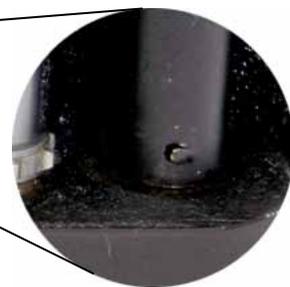




写真3 ゾンネV

ゾンネIVに比べてファインダー窓に窓枠が付き、軍艦部の形が変わった。

レンジファインダーは基線長38mmの2眼式。シャッターは布幕横走りフォーカスブレンシャッターで、1/20秒以上の高速のみで、B、1/20、1/50、1/100、1/150、1/250、1/500、1/1000というやや変則的な速度系列になっている。

レンズマウントには39mmライカ・スクリューマウントを採用していて、標準レンズとしてガリオ製のAnastigmat “T” ELIONAR 5cm F3.5 (エルマータイプ)が付けられていた。なお、ゾンネに付けられた距離計連動用のコは薄い板状のものであるため、このボディに通常の39mm径ライカマウントレンズを付けた場合には距離計が働かない。

ゾンネIVは1948年から2年間にわたって恐らくは僅か500台足らずが製造・出荷されたとされる。なお、これ以降のヴェネシヤン・ライカは一つのモデルで1000台を超えて生産されたものはほとんどなく、少量生産がその特徴の一つとなっている。

このカメラを実際の撮影に使用してみた印象は、バルナックライカが本来持っている軽快さにはかなり欠けるところがあるものの、一方で上述のようなライカにない特長を備えているところもあり、ライカコピーの第1号機としてはむしろよくできていると言って良いと思える。

ゾンネV (Sonne V) (写真3、4)

1950年にはV型となり、新しく1、1/2、1/5、1/10秒の緩速シャッターが追加された。この緩速シャッターの速度設定ダイヤルは高速ダ



写真6 ゾンネ C4(タイプI)

ビューファインダーがC型よりもさらに大型化され、見やすくなった。また、シャッター速度設定リングと一体化されたシャッターリリースボタンの高さが増して使用に便利となった。

これで形態的にも単なるライカコピーの域をある程度脱したように思われる。ビューファインダーの大型化に揃えてフィルム巻き上げノブの高さも増したが、その結果、フィルム巻き上げは容易になったと言える。ファインダーのボディ前面左上の小型ダイヤルはシンクロ接点変更用ダイヤルである。



写真4 ゾンネV

ゾンネIVに緩速シャッターが追加され、そのシャッターダイヤルがシャッターリリースボタンの後方に新設された。

イアルの左後方に別に設けられた(写真4)。面白いのはこれがセルフタイマーの機構を利用したものであるため、作動中には“チー”という独特の音を発し、その速度設定は必ず毎回転行わねばならないことである。ほかにファインダー外観の変更が行われた。

ゾンネVは標準レンズにAnastigmat “T” ELIONAR 5cm F3.5、50mm F2.8あるいはSchneider Xenar 50mm F2を付けて1951年までに300~400台が工場から出荷されたとされる。

ゾンネC (Sonne C) (写真5)

1951年にはゾンネCが新たに出された。この“C”はカラー(color)を意味すると言う。Gattoはゾンネの改良についてファインダーに注力したようである。まず、基線長を4mm伸ばして一眼式レンジファインダーとし、ビューファインダーを18×11mmに大型化した。さらに、2個の角形レンジファインダー窓の間に40mmレンズ視野枠を正確に得るためのプリズム入り透視ファインダーを中央に新設した。その結果、ファインダー窓としてはレンジファインダー用の2個とビューファインダーの1個がすべて角窓のいわゆる三つ窓ファインダーになった(写真5)。さらにレンジファインダーには距離合わせを容易にするためにオレンジフィルターがかけられている。

シャッターおよびフィルム装填方式に変更はなく、400~500台が製造されたとされる。

この型から標準レンズはシュナイダー製のXenon 50mm F2またはXenar 50mm F3.5に変更された。

ゾンネ C4 (Sonne C4) (写真6~9)

ゾンネの最終モデルは1953年に出された



写真7 ゾンネ C4 (タイプII)

ビューファインダー窓の左下方に刻印された通称「日没マーク」が見える。



写真5 ゾンネC

ファインダーを大きく変更し、このあたりで通常のライカコピーからの脱皮の第一歩を図ったように思われる。一眼式レンジファインダーのビューファインダーを大型化し、中央に別の視野確定用ビューファインダーを置いたため三つ目となった。

C4である。一眼式レンジファインダーのビューファインダーはC型よりもさらに大型化(14×20mm)され、ほぼ等倍となった。その結果、全体のデザインはいわゆるライカコピーの域を脱した印象が見られる(写真6)。

筆者はこのタイプをゾンネC4タイプIと呼んでいる。

C4にはファインダーに関するヴァリエーションが、2種類あり、その一つが「日没マーク付き」である(写真7)。タイプIのレンジファインダー下に生じた空白部分に“Sonne”というカメラ名とともに日没を示すとされる図像が刻印されていて、これは「太陽」という名のカメラの製造が終了することを図形で表したものとする穿った解釈が行われている。カメラ自体のその他の点には全く変更はない。筆者はこのマークはC4の最終ロットのカメラにのみ刻印されたものと思っていたが、Body No.を当たってみるとC4の中に散在していて、最終ロットとは限らないようである。筆者はこのタイプをゾンネC4タイプIIとしている。

もう一つのファインダー・ヴァリエーションは三つ窓タイプである。文献上にこのタイプの記載は見られないが、C4型のなかにC型と同じように2個のレンジファインダー窓の間に独立したビューファインダーを組み込んで三つ窓としたタイプが存在していて、著者はその実機を所有している(写真8)。この追加されたビューファインダーは50mmレンズの視野を確定するためのものと考えられる。著者はこの三つ窓タイプをゾンネC4タイプIIIと呼んでいる。

ほかに、C4ではビューファインダーの大型



写真8 ゾンネ C4 (タイプIII)

C4のビューファインダーの左側に出来た空白部分を充たす形で視野確定用のファインダーを置いたと考えられる三つ目形式のC4である。カタログや文献上に記載が今のところ見当たらないところから、新しい発見として良いかと思われるが、ここではゾンネC4(タイプIII)としておく。



写真 9 ゾンネC4を上後方から見る

フィルム巻き戻しの際のA→R変更が巻き戻しノブの左後方にある小レバーを後方に引き出すことで行われるようになった。

分かり易くするためにノブを矢印の方向に引き出した形で示した。

化に合わせてフィルム巻き上げノブの高さを4mm増加させており、これにより結果的にフィルム巻き上げが容易になったと言える。また、アクセサリシューの位置が中央寄りの後方に移されたことに加え、フィルムカウンターが大型化され、さらにフィルム巻き戻しの際のA→R変更が小レバー引き出し方式で行う方法に変えられている(写真9)。これらの変更により確かに使い勝手は改善されたと言える。アクセサリシューは独特の小型のものが付けられている。ストロボとフラッシュのシンクロ接点の変更はボディ前面右上部の小さな円形ノブの回転で外から随時行えるようになった。これも改良点といえる。

本機には標準レンズとしてSchneider-KreuznachのXenar 50mm F3.5またはXenon 50mm F2が付けられ、そこには高級機であろうとした意欲が感じられる。

ゾンネC4は約700台の製造で終わり、その後の新機種への発展はなかった。その理由としては、C4が出された直ぐ後に本家のライカが画期的な新機種のM3を出したため、ゾンネとしてはそれまでのようなバルナックライカの小手先の改良ではその後が全く立ちゆかないことに気付かされ、C4以降の新機種への発展を諦めざるを得なくなったのではないかと考えられる。

吉田は「ゾンネをここまで育ててきたアントニオ・ガットの気概もここで潰えてしまった」と述べているが著者も全く同感である。

2番目のヴェネシアンライカは“クリスタル”

1949年に、ゾンネを製造した工場のあったポルデノーネからわずか5kmしか離れていないベッルーノと言う土地にキナーリア・ドメニコ(Chinaglia Domenico)社が新しく設立され、



写真 10 クリスタル2a

ボディの形状は円形でライカⅡによく似るが、全く同じではない。レンズ鏡胴もアルミ製と変わっている

そこで1950年からクリスタルKristallと名付けられた新しいライカコピー機の製造が始められた(クリスタルの製造開始は1948年という説明もある)。ここにヴェネシアン・ライカの第2号機が出たことになる。ただ、クリスタルは同じライカコピー機と言っても前述のゾンネとは明らかに性格の異なるカメラであり、また、異なる経過を辿ったことも事実である。また、このとき恐らく別の工場ではヴェガ(Wega)の製造も始まっていて、それらの製造工場の間には相互関係があつて然るべきと思われるが、それらの関連の詳細は良くわかっていないという。

クリスタルは発売当初はミラノの卸売業者のグイド・ノニーニ(Guido Nonini, Milano)の専売とされたため初期のクリスタルのトップには“GN.M”と刻印されたが、のちに製造元の“CD (Chinaglia Domenico)”または“AFIOM (Apparecchi Fotografici Italiani Officine Meccaniche)”に変更されている。

クリスタルは最初、距離計連動機の2型から始まったが、次にそこから距離計を取り除いたクリスタルが出され、さらに、クリスタル2s、クリスタル2aを経て、低速シャッターを加えたクリスタル3となり、そこで1953年に形を大幅に変更したクリスタル53へと進化した。

そして、ここで派生的に新しい機種のヴェガとヴェガⅡaが出されたのち、1954年に最終型であるクリスタルRを出すことによりカメラの生産を終了した。キナーリア・ドメニコ社自体は計測器メーカーとしてその後も活動を続けていたという。

クリスタル2a及び2s (Kristall 2a & 2s)

(写真10、11)

最初のクリスタルは2型と呼ばれ、1950年と51年に製造されてCDブランドで発売されたといわれるが、距離計を持たないクリスタルが1948



写真 11 クリスタル2aのボディ内部(底部)

ライカと同様にフィルム装填は底部より行う形式である。○にKのマークが底部に記載されている。

年には発売されていたという説明もある。

2a型のボディの左右両端は角を丸くとしているがライカやゾンネのように綺麗な円形には成形されていない。フィルムを底から入れる方式を採用しているところなどは明らかにバルナックライカのコピーとして良い。すなわち、ゾンネよりもライカに近いライカコピー機である。しかし、僅かに異なるところもある。軍艦部を3mmほど沈める形をとっているがそれでもボディ全体はライカよりも少し大きくなっている。“Leica Copies”ではボディのトップとボトムにステンレス・スチールが用いられていることを特徴として挙げている。しかし、ステンレス・スチールが使用されているわけではなく、この記載は誤りである。

2a型の2眼式レンジファインダーの基線長は39mmと標準的である。シャッター速度は高速のみでB、1/20、1/30、1/40、1/60、1/100、1/200、1/500、1/1000の9速という設定が可能なのはライカ並みである。フィルム・リワインドの方式としてはバルナックライカのようにA→Rレバーを合わせるのではなく、シャッターボタンのカラーを回してセットする方式がとられているところが独特である。

2a型は1950年から約1,000台が製造されたというからヴェネシアン・ライカのなかでは最も多く作られたカメラと言える。吉田高盛の解説によればライカが高価すぎて購入できないハイ・アマチュアに向けて作られたカメラと考えられ、それなりの存在意義があったのであろう。標準レンズとしてアルミ鏡胴のKristall-SteinarあるいはKristall-Krinar 50mm F3.5が付けられたという。

1951年にはシャッター最高速度を1/500秒にスペックダウンした2s型も製造されたが、これは300~400台が製造されたに過ぎないとされる。

クリスタル 3s (Kristall 3s) (写真12、13)

“Leica Copies”の記載によると、1951年にクリスタル2sのシャッターが改良され、1秒~1/20秒の緩速シャッターが追加されたクリスタル3sタイプ1(写真12)が出されたことになっている。この型は200~300台が製造されたと言ふ。1952年には軍艦部を屋根型としてボディと一体化し、それまでとは全く異なる外観を示すクリスタル3sタイプ2(写真13)に進化した。吉田高盛によると、クリスタル3sは「非常に仕上げが美しいカメラで、一つ一つの露出した部品が程よい曲線で仕上げられ、金属であるのに妙な柔らかさに似た感触を生み出してい



写真 12 クリスタル 3s タイプ 1

1951年にクリスタル2sのシャッターが改良され、1秒~1/20秒の緩速シャッターが追加されたもの。



写真 13 クリスタル 3s タイプ 2

1952年には軍艦部を屋根型としてボディと一体化し、それまでとは全く異なる外観となった(写真は後期型で53の刻印もある)。



写真 14 クリスタル・スタンダード

距離計を省略したクリスタルがこのクリスタル・スタンダードである。ヴェガと全くと言ってよいほど同じものである。高速シャッター速度が13段階にセット可能となった。



写真 15 クリスタル 53

軍艦部が台型になり、2眼式レンジファインダーであるが大型のビューファインダー(11×18mm)を採用している。



写真 16 クリスタル 53

ファインダー部分の拡大写真

ファインダー内に6種類の焦点距離に対応した視野枠のマスクが入れられていて、これをスライド式にレバーで交換する。また、シャッター速度設定ダイヤルも1軸で大型化された。

る。これはイタリアならではのデザインセンスで、作りそのものはさほどではないものの、使っていて楽しくなる不思議な魅力を持っている。」と紹介されている。タイプ2もわずか200台ほどの製造とされる。

クリスタルスタンダード(Kristall Standard)

(写真14)

1952年にはヴェガ・スタンダードと同形のクリスタル(クリスタル・スタンダード)がCDブランドで発売された。このカメラはクリスタル3s型からレンジファインダーを取り除いてビューファインダーのみとしたスケールフォーカス機であり、ボディ両端はキャノンのような八角型に変更された。シャッターは1/20~1/1000秒の高速のみであるが、吉田によると中間速度が設定できるようになっている。そして、速度設定目盛りはB、1/20、1/30、1/40、1/60、1/100、1/200、1/500、1/1000と記されているが、1/20と1/30、1/30と1/40、1/40と1/60、1/60と1/100の間には線が引かれていて、ここに合わせることでそれぞれの中間値が出せる。すなわち、これによりそれを利用することでB、1/20、1/25、1/30、1/35、1/40、1/50、1/60、1/80、1/100、1/200、1/500、1/1000秒の13種ものシャッター速度設定が可能になる。このクリスタル方式とでも言うべきシャッター速度設定方式はこの後のクリスタル各型およびヴェガ各型に引き継がれた。

クリスタルスタンダードのビューファインダーの大きさやシャッター速度ダイヤルの形には2種類があり、それらはヴェガ・スタンダードのものと同様である。

張り皮が黒色しぼ皮となっているのがこれが



写真 17 クリスタル R

ファインダーはショートベースの一眼式レンジファインダーとなった。

ボディの黒色しぼ皮張りがイタリアカメラらしい雰囲気を出している。



写真 18 ヴェガ II a

本機は、CDロゴの入ったヴェガ II aである(Body No.40154)。ヴェガ 2aはカメラの製造が1952年にAFIOMからCDに引き継がれたあとに名称だけをヴェガ II aからヴェガ 2aに変更して200~300台の少量が製造されたと言うカメラである。

クリスタル53 (Kristall Patented 53)

(写真15、16)

1953年にはクリスタル3sタイプ2のファインダーが大きく変更され、9×14mmという大型のビューファインダーを真ん中に置く2眼式レンジファインダーを建築で言う寄棟型の屋根の形に一体成形したファインダーとしている。このファインダーは焦点距離28mm、35mm、50mm、75mm、90mm、105mmの6種類もの視野枠をレバーによるスライド式マスク交換で得られる新しい方式のファインダーであり、これが1953年に出されたことからクリスタル53と名付けられた。写真14に示したこのファインダーの構造で特許が取得されたためカメラ名にも”Patented 53”と刻印されることになった。ただ、実はこのとき、クリスタル用のレンズとしては50mm標準レンズが1本しかなかったため、この可変枠ファインダーの採用は実際上、実用価値がそれほど高くない変更であったという説明がある。

シャッターは2軸式でクリスタル方式の緩速1、1/2、1/4、1/8、1/20の5段階、高速がB、1/20、1/30、1/40、1/60、1/100、1/200、1/500、1/1000の9段階に中間速の1/25、1/35、1/50、1/80を加えて併せて18段階のシャッター速度を緩速優先で設定する方式をとっている。

ここで、クリスタル53の標準レンズとしてはじめてフランス製のSom Berthiot 50mm F2.8が

加えられた。ボディナンバーは3sから引き継がれ、1999以降のNo.は11000から始まり、500~700台が製造されたとされる。

クリスタル R (Kristall R) (写真17)

1954年にクリスタル/ヴェガシリーズの最終機としてCDブランドで出されたのがクリスタルRである。ボディの形態は八角型で、レンジファインダーには初めてショートベースの一眼式が採用された。ショートベースであるにもかかわらずファインダー窓は大きく取られ、オレンジ色に着色されているので焦点は合わせやすくなっている。シャッターは1/20~1/1000秒の高速のみのクリスタル方式である。標準レンズにはKrinar 50mm F3.5、Som Berthiot 50mm F2.8、Schneider-Xenon50mm F2などを付けて300~400台が製造されたといい。

1954年にライカが画期的新機種M型に変更され、M3を出してライカコピーの元になったバルナックライカと一旦、別れを告げた。これを見たヴェネシヤン・ライカ製造各社はそれまでのバルナックライカコピーではライカコピーそのものが立ち行かなくなったことを悟り、ヴェネシヤン・ライカもそれまでは毎年行ってきた新機種の発表を1954年以降は中止するに至った。その結果、クリスタルRはヴェネシヤン・ライカの掉尾を飾るカメラとなったものである。

ヴェガ (Wega)

ヴェガは1951年にレンジファインダーを持たないヴェガとして、ゾンネを製造して来たボルデノーネで作られ、AFIOMブランドで発売された。即ちヴェネシヤン・ライカの第3号機と言うことになる。吉田高盛の解説によれば、ヴェガは当時イタリアでは一般に高価であったライカ型カメラをできるだけ安価に提供しようとして作られたものであり、日本で言えばレオタックスやニッカに相当するカメラであるとされる。

ヴェガ(Wega Standard)

クリスタルスタンダードとほぼ同じのものである。レンジファインダーを持たないレンズ交換可能なスケールフォーカス機であり、八角型のボディを持つ。シャッターは1/20~1/1000秒の高速のみで、シャッター速度ダイヤルの



写真 19

文献上に記載のないヴェガⅢaを示す。ヴェガⅡaに緩速シャッターを追加した手法はクリスタル3sとまったく同じである。

形とファインダー窓の大きさに2種類があったようである。標準レンズにTriaxar 50mm F3.5を付け、1951年に600～700台が製造されたとされる。

ヴェガⅡaおよび2a (Wega IIa & 2a)

(写真18)

2番目のAFIOMブランドカメラとして1952年に出されたのがレンジファインダー機のヴェガⅡa型である。八角型ボディで、クリスタル方式高速シャッターのみを持つが、シャッターダイヤルの形はキノコ型に変更している。ライカⅡのコピー機であり、それ以上に特別に進化させた部分はなく、兎に角、安価に提供しようとした意図がありありと感じ取れる。しかし、全体の作りは良く、「安かろう、悪かろう」に堕した印象は全く見られない。実際に使用してみても問題となる部分の見られない実用的な良いカメラであった。広告掲載の価格を見ても、同じレンジファインダー機のクリスタル2Sが54,000リラのところヴェガⅡaは44,500リラに抑えている。

レンジファインダーの基線長は39mmで標準的であるが、約1.5倍の倍率のかかったビューファインダーは見やすい。全く同じものであるが、CDのロゴの付いたものが2aである。標準レンズに自社銘柄のTriaxar 50mm



写真 20

ヴェガⅢaはⅡaにスローシャッターを追加したものであるが、シャッタースピードダイヤルはクリスタル53と同様に前側に付けられている。ダイヤルの前縁が僅かに前方に出されて指かかりが良くなっている。

F3.5を付けて合計1000～1300台が製造されたというから、クリスタル/ヴェガのシリーズのなかでは最も多く作られ、沢山に売れたカメラだったのであろう。

ヴェガ2aはカメラの製造が1952年にAFIOMからCDに引き継がれたあとに名称だけをヴェガⅡaからヴェガ2aに変更して200～300台の少量が製造されたと言うカメラである。

ヴェガⅢa (Wega IIIa) (写真19、20)

ヴェガの機種に関する文献上の記載ではスタンダード型、Ⅱa型、2a型の3機種が見られる。しかし、筆者の手元にはWega IIIaと刻印された4機種目のAFIOMブランドのカメラがある。これはⅡ型には緩速シャッターが無かったが、評判が良かったので、クリスタル3sの手法にならって1～1/20秒の緩速シャッターを追加してⅢaとしたカメラであると考えられる。AFIOMブランドとなっているところから見てCDに移る前にごく少量が製造されたものと考えられる。シャッター速度はクリスタル由来の緩速4段階、高速9段階の13段階の設定が可能となっている。

ヴェガⅢは普及型に徹していたヴェガが最後に出した高級機と言えよう。

終わりに

ライカコピーは北イタリアと日本で多機種が作られたが、地理的にヴェニスに近い位置にあった3カ所の工場で製造されたライカコピー機はとくにヴェネシアン・ライカと呼ばれ、短期間ではあったが独自の発展を見せている。ゾンネおよびクリスタルとウェガという二つの系列としてほぼ同時期に製造されたカメラたちであったが、それらのカメラとしての性格はゾンネとクリスタルでは全く違うと言って良く、いずれもライカコピーとしていささかの向上への期待を持ちながら進んだものの、結局、どの機種もライカコピーの域を超えることなく、相当の技術やアイデアを持ちながら、どの例を見ても高級カメラとして大きく育たなかったというイタリアカメラ業界に特有な経緯がここでも示されているように思えて興味深いところであった。このヴェネシアン・ライカの終焉が、ライカM3の発売が引き金となっていることもライカのカメラ業界に与えた影響がいかに大きいものであったかが示されていて、大変に面白いと思えた。

(了)

参考資料

1. Danilo Cecchi: Venetian Leicas. Classic-Camera. No.9, 20-29, 1999
2. HPR: Leica Copies. Classic Collection Publications, 1994
3. Patrice-Herve Pont & Jean-Loup Princelle, :300 Leica Copies. Fotosaga, 1990
4. Antonetto & Malavolti: Made in Italy. Fotocamera, 1983
5. Mario Malavolti: Fotocamera italiane. Fotocamera, 1994
6. 吉田高盛: 摩訶不思議! イタリアン・ライカコピー機. クラシックカメラ専科, No.75, 2005